

雑用係の地味な私が伝説の聖女に転生したら、

イケメンすぎる剣士と重戦士と魔導士に極限まで連続絶頂された挙げ句、
最強皇帝に横取り調教される

プロローグ

第一章 異世界

第二章 剣士 フィロス・エスペランザ

第三章 盾 ジルド・ヴォーリアル

第四章 魔導士 ゼペル・マルファス

エピローグ 皇帝と見せしめの初夜

プロローグ

わたしの人生は、失敗を避ける為だけに必死の人生だった。

三十歳、独身。地味な服装に眼鏡をかけて、ストレス解消のドカ食いで育った……
「ぽっちゃりボディ」。三十年間、男の人に言い寄られたことなど一度もない。

「おい。カメラ撮ってくれ」
「あっはい」

男子は、可愛い子らと写真を撮るのに夢中。私は、まるでアシスタントディレクター。
この旅行は、会社の若い男女が企画した、近場でのバーベキュー旅行だった。なぜか、私も誘われ、のこのこついて来てしまったのだ。男三人、女四人のアンバランスな構成。

「ビール取ってー！」
「あ、はい」

来てから知ったのは、私は、その一泊旅行の雑用係だった。三対三の合コン旅行に、友達だよね？ と誘われてついて来てしまったというありさま。

「ちよつと肉足して」

「あつ、はい」

小間使いみたいに、せつせと可愛い子らの手を汚さぬよう雑務をこなしていく。

期待してないかと言ったら、うそになる……私が気になるあの人もいたから。だけど、私なんかには全く眼中になく、一番かわいい子に夢中のようにだった。

そうよね……あの子らは、可愛い。私は必死に化粧しても、中の中にしかない。

水面に移る私のシルエットを見ても、ただのぽっちゃりのおばちゃんでしかなかった。そんな私に、彼が興味を示すわけは無かった。

みじめ。これで、一泊しなきゃいけないなんて地獄だった。

バシャーン！

「子供が落ちたぞー！」

「えっ！」

目の前を、一人の子供が流れていく。どう考えても、私が一番近い。

「だれか！ 助けて！」

母親らしい人の叫び声。もう飛び込むしかなかった。

ザブーン。

子供が流れて来たところに追いつくと、子供が私にしがみついて来る。

「あぶぶぶ。ちょ、ちよつと力を抜いて」

「怖いよー！ 怖いよー！」

すっごい力ですがみつかれて、何とか必死に泳ぐが前に進まない。何度も水を飲み、私はだんだんと力尽きていく。そして岩場が近づき、何とか子供だけ岩に押し上げた。それが……限界だった。

「良かった……ぶくぶくぶく」

力尽きて流された瞬間に、わたしの人生は一度、終わった。

視界が真っ暗になり、多分、私は死んだのだろう。と思っていた……。

「う、うう」

目を開けると、川辺に打ち上げられていて、目の前は深緑の森の中だった。

「……ん、……生きてる。た、助かったあ…… け、怪我は？」

慌てて自分の身体を触り、絶句した。

「えっ……なにこれ、あれ？ 痩せた？ 怪我した？」

手の肌は陶器のように白く、めちやくちや水をはじいている。

「ど、どういう事？ なにこれ？」

慌てて近くの川を覗き込むと、そこにいるのは眼鏡を外したわたしではなかった。潤んだ緑色の大きな瞳、桜色の唇、小ぶりでつんと尖った鼻、髪色がピンクゴールド。ぼっちゃりじゃない、暴力的なまでに魅力的なわがままボディの美女が写っていた。地味なカーディガンのボタンは、胸のボリウムに耐えきれず弾け飛んでいる。

「これ、わたし……？ うそ、嘘でしょ？ 信じられないくらい可愛くなってる！」

どう見ても中の下ではなく……上の上の上だ。

「なに、なにになになにに……！」

戸惑っていると、背後から地鳴りのような咆哮が響いた。

「があああああ！」

「えっ？ 熊？」

振り向けば、三メートルはあるバケモノが姿を現す。熊じゃない、人間のようなだが、頭の上に角が生えてるし、腰布以外は裸だった。どうかんがえても、尋常じゃない。

「ぎゃああああ！」

腰を抜かして動けないわたしの前に、突如、銀色の閃光が走った。

ズバッ！！

バケモノを一撃で切り裂いたのは、超絶イケメンの……騎士……だった。

「ギャアアア」

思わず、内臓をまき散らして倒れるバケモノを見て叫んでしまう。

「どうした！」

その後から、盾を持つ屈強な男と、そして神秘的な杖を持った男が来る。

「大丈夫か」

銀髪の騎士が、わたしの手を取った。その瞳には一度も向けられたことのないような、男の強烈な熱が宿っている。

「あ、あの！ とにかく帰りたくて！ ここは秩父ですよね？」

「チチブ？ いや、ここは魔獣の森だ」

「マジューの森？？」

だが、騎士は私の言葉など聞いちゃいない。

「なんて芳醇で美しい方だ。この地に、これほどの光を放つ乙女がいたとは」

「えっ、美しい？ わたしが？」

「あなたは、もしかして女神でしょうか？」

生まれて初めて言われた言葉に、心臓が跳ね上がる。イケメンすぎるその騎士の手が、わたしの腰をぐいと引き寄せた。いままで誰にも見向きもされなかったこのわたしが、イケメンの腕で最高の宝物のように扱われている。

……えっ、待つて。こんな超絶イケメンに？ 大切にされてる？

盾を持つ男が言う。精悍で更に一回り筋肉が多いマツチヨ、これまた……イケメン。

「な、なんと美しい……なぜ、このような危険な森に……」

「あの、ちよつと、川でおぼれて気が付いたらここに……」

今度は神秘的な杖を持つ、美しいロン毛のシャープな顔立ちのイケメンが言う。

「……女神さまではないのですか？」

「いえ。人間……だと思っんです。たぶん」

「お美しい……」

まって。なんで、どういうこと？ 夢じゃないよね。うそだよ？

ぎゅつと、ほっぺをつねってみる。

「痛っ！」

「な、何を……」

「きつと錯乱されておるのだろう。連れて行こう」

「だな。あなたの、お家はどちらか？」

「えっと、亀戸」

「カメイド？ 聞いた事のない異国のようだ。まずは私達と共に」

そして三人に連れられて、私はその森を抜けていく。だけど、時おり化物が現れて、都度三人は連携して倒していった。ようやく森を抜けた時……信じられない光景。

サアアアアア！ と風が吹き抜けた。

そこには、見た事も無いだたつひろい平原が広がっていたのだった。

「えっ。どこ……」

「少し行けば、宿場町がある」

そして、言われるとおりに歩いて行くと、そこに小さな木造のログハウスが立ち並ぶ、原始的な村が現れたのだった。

「えっ！ えっ！」

「見れば、その服装。変わったものすな」

「えっ。普通ですけど」

するとそのまま先に行き、馬が繋がれている小屋に行く。

「このまま、辺境領の都市までまいりましょう」

辺境領……そうか……間違いはない。さっきの、あんな生物が地球にいたとは思えない。

私はどうやら、異世界転生してしまったらしかった。

第一章 異世界

馬に乗せられて、見たこともない大草原を進む道中。わたしの後に座っている騎士が、わざと身体を密着させ、わたしの肩や腰に触れてくる。

「窮屈でしょうか？」

「いえ♡」

声をかけられるたびに、わたしの理性はウハウハと歓喜の声を上げていた。

多分……ここは……天国だ。不憫な私を、天国が迎え入れてくれたんだ。

と思うが、匂いも風の感じもリアル。間違いなく、生きているようだった。

到着した街のギルドで、わたしは女神の化身かもしれないと、個室へと案内された。ギルドマスターとやらが目の前で、鼻の下を伸ばしている。

「いやあ、彼らがいてよかったねえ。彼らは、王宮御指名のS級冒険者だからねえ」

「S級……」

「あの森はね、奥に高難易度のダンジョンがあるんだよ。だから、彼らはそこにいた」
「そうなんですわね」

「で、あなた様は？」

どうしよう……変だと思われるかも。どう考えても、日本の事なんて知らないだろう。

「か、川でおぼれて思い出せないのです」

「記憶喪失かもしれませんねえ」

するとそこに、ボタン！ と扉が開いてギルド嬢が飛び込んできた。

「大変です！ 怪我人です！ もう、死にそうです！」

「なに！ すぐ行く！」

そこには、担ぎ込まれたかなりの重症者がいた。

「魔獣の森でやられたらしい」

「Bランクでもダメか……」

「こりや……もう助からんな」

確かに……そうかもしれぬ。だけど……諦めんの？　ちよつとまって！

まただ……子供を助けた時のように、ただの、いいひとの血が騒いで来た。

わたしは、怪我をしていた人のところに行つて、しやがみ込んで叫ぶ。

「お医者様は？　まだ、なんとかありませんか！」

怪我人に何気なく手を触れた瞬間、突然、わたしの掌から温かな桃色の光が溢れ出し、深い傷を一瞬で塞いでしまったのだ。内臓が引つ込み、傷がきれいさっぱり無くなる。

えっ……うっそ……。

自分でも驚いていると、周りの人らが更に驚いている。

「おおおお！」

場が騒然とし、ギルドマスターが大声で言う。

「……治癒魔法！ それも、詠唱もなしにこれほどの密度！」

杖を持つ魔法使いが、眼を鋭く光らせた。

「このお方は……やはり、伝説の聖女様では？」

「な、なんだと？ 伝説の……」

「それ以外に説明がつきますか？ ギルマス」

「い、いや……」

そこで、私を一番最初に助けた騎士が言う。

「聖女様……ぜひ、私達と同行いただけますか？」

「えっと、どこに？」

「王宮です」

是非もない！ 強いイケメンに断る理由など無い。

「はい……」

比類なき美貌を持ち、伝説級の治癒魔法を操る乙女。本当は記憶はばっちりあるけど、それは現代日本の記憶。ここでは、完全に記憶を失ってる方が都合が良かった。

わたしはS級冒険者。パーティー銀の獅子に、同行して王都に行くことになった。

「あの、また、あのバケモノがでたら？」

「魔獣かい？」

「そう、その魔獣が出て来るのでは？」

「心配いらない。君のその柔らかな身体に、傷一つ付けさせはしない」

銀髪のイケメンすぎる騎士が、わたしの腰を抱き寄せて優しく囁く。

「じゃ、じゃあ。お願いします」

秩父のBBQで雑用係だったわたしが、今はS級冒険者に女神様と崇められている。理性が歓喜で震えていた。三十年間の不遇に対する、神様からのボーナスに違いない。

「では、いざ王都へ！ 陛下にお目通りを願いましょう。伝説の聖女なら、それがいい」
「わかりました」

とにかく、右も左もわからない私は従うしか無かった。

第二章 剣士 フィロス・エスペランザ

馬車を用立てられ、三人の冒険者と共に王都への旅路となった。数日は馬車で移動し、その途中の宿場で休みながら進むという。そうして辿り着いた、最初の宿屋。

「男三人部屋と、女性用の一人部屋を」

「かしこまりました」

フィロス・エスペランザ。剣士の彼は、細マッチョの体に、水色の髪の毛が特徴の、大きな目が印象的な優しそうなイケメン。彼が、スマートに私たちの部屋をとる。

「では、聖女様。お一人部屋へ」

「はい」

とにかく、やっと休める！

溺れてギルドに行つて、ここまで馬車でウトウトしたくらいの私。もうへとへと。

だが、その夜だった。

コンコン。

「はい」

「フィロスです」

「あ、どうぞ」

そして私が鍵を開けると、彼がスマートに入つて来る。

「不安ではないですか？」

「ええ、少し」

「では、お話でも」

嘘……こんな、イケメンと二人きりなんてありえん！

そして彼は、私の気持ちをほぐすような、これまでの冒険話をしてくれた。

「凄いですね」

「いえ。それが、Sランク冒険者の使命ですから」

「素敵です」

するとフィロスの表情が、少しだけトロンとしたような感じになる。

「お疲れでしょう。マッサージをして差し上げましょう」

うそ！ いいの？ 私に触れてくれるの？

思わず歓喜してしまうが、ドキドキしながらも、しとやかに答える。

「そうしてくださいますの？」

「ええ。聖女様の疲れを癒やすのも、護衛であるわたしの役目ですから」

フィロスは、優しく微笑んでわたしの肩に手を置いた。薄手の寝間着越しに伝わる、彼の指先の熱。亀戸にいた頃のわたしなら、こんな地味で可愛くない私に触れるなんて、何か裏があるんじゃないかと身構えていただろう。でもわたしは、彼の柔らかな眼差しに、すっかり毒気を抜かれていた。

「では、失礼しますね」

彼の手が、わたしの首筋から肩甲骨に滑る。指先が、柔らかい肉に沈み込んでいく。

「……っ、ふぁ……」

思わず、変な声が出てしまった。マッサージは、驚くほど丁寧で、それでいて力強い。異世界に来てからずっと張り詰めていた緊張が、彼の指先から溶け出していく。

「聖女様の肌は、本当にきめ細かくて素晴らしい。触れるだけで指が吸い込まれそうだ」

フィロスの声が、わたしの耳元で低く優しく響いた。気が付くと、手は肩から背中、そして……ウエストの、一番柔らかいくびれの部分へと移動していた。

「あ、んっ……そこ、は……」

「ここが、お疲れのようですね。……少し、服が邪魔だ。よろしいですか？」

断る間もなかった。彼がスマートな指先で服の紐を解くと、わたしの肩から寝間着が、はらりと滑り落ちる。窓の月明かりの下に晒された、わたしの豊満で魅惑的な白い背中。そして、脇から溢れる豊かな胸の膨らみ。

「なんてお姿だ。聖女様は、ご自身がどれほど男を狂わせるか、分かっているようにだ」

フィロスの指が、わたしの背骨をなぞり、そのまま腰骨のくぼみへと降りていく。彼の熱い掌が、わたしのお腹を横から包み込むように揉み上げた。

「ほら、こんなに柔らかい。……ここを弄られるのは、初めてですか？」

「ひゃうんっ！ あ、あぁっ♡」

彼の指が、わたしの柔らかいお肉を捏ねるたびに、股間の底がキュンと疼いてしまう。三十年間、一度も男の人に愛でられたことのなかったわたしの身体に、触られてる。イケメンの、それもS級冒険者に美しいと囁かれながら触れられる。この異常な状況に、わたしの理性は歓喜を上げ、同時に白濁した快感に飲み込まれていった。

「フィロス、さん……っ、もう、わたし……」

「聖女様。……あなたの、潤んだ瞳。……俺だけに、もっと酷い顔を見せてください」

彼はわたしをベッドに押し倒すと、髪を揺らしながら、首筋に熱い唇を押し当てた。細マッチョな彼の身体が、わたしのふくよかな胸に沈み込む。

「もう……我慢が出来ません」

柔らかさと、硬い筋肉。その対照的な感触が、わたしの本能を激しく揺さぶった。

すると、股間にフィロスの手が潜る。

「あっ……」
くちゅう。

濡れてる……。この、初めての感覚に、全身が粟立つ。

「もう……熱くなってますね……ここ」

「やだ、恥ずかしい……」

「恥ずかしがることはない。もっと、気持ち良くしますからね」

じゅふう。くりゅつ。くりゅくりゅ。

沈めて蜜で濡らした指で、私のクリトリスを揉みしだいた。

「あっ ♡ あっ ♡ あっ ♡」

幸せ過ぎる……。こんな絶世のイケメンに愛撫されるなんて、人生で一番幸せだった。

「溢れてきちゃいましたね。飲ませてください」
「あ、えっ？」

フィロスが、するりと下に潜っていく。

ちゅぷ。

「ああふ……」

フィロスの舌が、わたしのおまんこに落とされた。そして愛液を舐めとるようにして、舌を潜り込ませる。

じゅぷぷぷぷ。ゴクリ。

私の液を飲んでいる。

「あっ！」

「やはり、美しすぎる人のここは、とてもかぐわしい。ああ……聖女様」

「はい……」

「私に、その聖水を」

あ……この人。Mなんだ……。

そして、気が付く。あまりに疲れていて、トイレに行かずに眠った。パンパンの膀胱を。だけど……わたしは、ベッドを汚したくないと思ってしまった。

「床に跪いてくださいまし」

「はい……」

フィロスがベッドを降りて、跪いた。わたしは彼の前に、股を開いて座る。

「ああ……聖女様の、蜜壺が目の前に……」

「飲んでくださいますの？」

「ええ」

もう……我慢が出来なかった。フィロスの肩に足をかけると、フィロスが舌を出して口を大きく広げた。

ちよろ……。

うう、でもやっぱり恥ずかしい。だが、フィロスが恍惚とした表情で待っている。

ちよろちよろちよろ、ふしやああああああ！

私のおしっこを口や顔で浴びて、嬉しそうにしているフィロス。

「ゴクッゴクッゴク」

「うあ」

「ああ……聖女様」

出し終わると、ブルブル震えてしまう。だがフィロスは、私のおまんこに口をつけて愛おしそうに、全てを舐めとっていく。

「ああ……」

人生最初の経験。そもそも、男性経験などありやなかった。それにもかかわらず、イケメンにいきなりおしっこを飲まれた。それだけで、私はぞくぞくとしてしまう。

「でも、このまま聖女様にキスをしては申し訳ない」
「えっ……」

そう言って彼は、水瓶から水をすくい顔を洗う。布で顔を拭いて、わたしの前に座る。

「ありがとうございます。聖水を頂いた、お礼をしなくてははいけませんね」
「お礼……ですか？」

彼が私の両足を、ベッドに持ち上げて乗せた。M字の形で、おまんこをまる出しにし、

じつとフィロスを見ていると、そつと舌をだしてクリトリス乗せる。

くりゅん。

「あっ♡」

くりくりゅくりゅ。　ビンビンビン。

電流が走るような感覚、そしてフィロスはわたしの顔を上目遣いに見る。

「ああ……。聖女様、なんて熱い……。すべてが、わたしという器を求めておいでだ」
くりゅ、くりゅくりゅ……。

フィロスの生き物のような舌先が、小さな突起を逃さぬよう、執拗に繊細に転がす。クリトリス一点に集中して与えられる刺激に、わたしの身体は弓なりに反り返った。

「あ、んっ！ フィロス、さん……そこ、だめ、頭が……っ！」

「いいのです。もつと、私にぶつけてください。その昂ぶりが、私の悦びなのですから」
くりゅん。くりゅくりゅ。

彼はそのまま舌を平たくし、吸い上げるようにしてクリトリスを包み込んだ。

ちゅぶ、ちゅぶ。……っ。じゅるるる。じゅるるる。

まるで熟した果実の蜜を啜るような、湿った音が静かな部屋に響き渡る。

「あ、あああああ！ そこ、ビンビンする……っ！ あ、ああっ♡」

羞恥心などどこかへ消え失せ、わたしの脚は彼の頭を挟み込むように強く巻きついた。けれど、彼はそれを歓迎するように、さらに深く鼻先を押し当て、内側の柔らかな粘膜まで、舌先で丹念に舐め上げていく。

じゅぶぶ……じゅぶぶ。

「……聖女様、柔らかな中が……こんなに熱く、締まり始めておられるではないですか。……私に、もつとあなた様の証をください」

彼は指を一本、とろとろに解けた臍の入り口へと差し込んだ。

くちゅ……。

その指で中を探りながら、舌先でクリトリスを高速で弾き続ける。執拗な波状攻撃に、わたしの頭の中は真つ白な火花が散った。